

□いつかは實を結びて

肥前 T M 生

私は肥前の片田舎に住ふ本誌讀者の一人であり、昨春友人の家で、或雑誌の美しい水彩畫の口繪を見まして、自分も畫ひて見たい様な感が致しました。で早速其本を貸して貰つて用紙に模寫して見たが一向其繪に使つてある様な色が出ませんので此は繪具が悪ひ爲だらうと其儘止めてしまいました。

處が其夏本誌が出ましたので早速買つて見ると先づ巻頭の口繪、此を見て居ると見ている程美しく、私の水彩畫熱は又むらくと再發しました。其からずつと頁をくつて十三頁の『ういまなびの方へ』と言ふ所を讀んで見て、自分等の様な初學者の者も畫き能はぬ事はあるまいと早速用意をして大膽にも野外へ飛び出し、イーゼルならぬ膝の上にて畫ひて見ましたが思ふ様な色は出ず、青色許の化物の様な畫が出来ました。是は戶外の寫生が餘り早かつたのかと、家へ歸つて色々の繪具を混ぜてやたらにやつて見たが、遂に失敗に終りました。其から本誌第五にスケッチの説明が載せられましたので其によつて描ひて見ました

所が此度は繪らしい物が出来ました。斯く度々失敗致しましたが是が却て自分に奮發心を起さしめ、益々面白味を感じる様になりました。何時かは實を結ぶの時あらんと熱心につています。併し鄙地の事て大家の肉筆畫を見る機會のないのが一番の困事です。

□日曜には畫囊と辨當

平澤輝吉

至て僕は畫が好で、幼少の時から紙さへあれば畫く事を樂みにしていました。今でも時々母親が、御前の幼なかつた時分には、畫の手本を書いてくれくと云ふて實に弱つたよと云はれて居ります。小學時代はいつしか過ぎ、中學へ入學してからは水彩に熱心になり、其中にも風景畫を好み、始終畫いて居りましたが、小學時代の日本繪的筆跡が抜けず、洋畫とも日本畫ともつかぬ至極曖昧な者を書いて満足していました。而し三十六年の頃であつたか、洋畫會で水繪を見た、御恥しいが僕が肉筆の水彩を見たのは是れが初めて、此時自分の心は異様な感に打たれ、今迄畫き來つた所を思へば、吾れ乍ら可笑しく又呆れるの外はなかつたのです。僕は是れに因て少な

ず感動し、水繪と云ふことは益々自分の頭に印象せられたので、以後臨本に因て一心に練習しましたが、思ふ萬分一も抄取らず、悔しさの餘りいつそ水繪といふことを斷念しよと迄、思ひましたが、或日朋友と遠足の歸路、飛鳥山で三脚を腰にせる人を見うけ、此處に初めて戶外寫生の徳を知り、再び心を翻ひし、以來日曜には必ず辨當と畫囊を背負つて家を飛出しますが、眼前が總て實物なるだけに興味が多く、又意外の成功がございます。

□輕便畫架

米澤 美海生

輕便畫架、これは三本足の畫架や三脚の輕便と云ふ譯ではない、尙更に輕便と云ふのである。其れは畫囊一ツあれば大丈夫である。其方法は畫囊の袋の付いて居らない方を開き返して紐と紐とを結び合するのである、若し短き時は別な紐を加へて程よくする。僕の畫囊は自製であるから紐は六寸以上ある。結び合はすると一尺位になる。

それから使用する時は紐の方を下にして前後に開き立て、畫板をのせ又畫紙をピンで止めるなど隨意である。然して野外寫生の時草原